

茅コンファレンス最終章を迎えて

茅 幸 二

本年 6 月 11 日をもって茅コンファレンスが幕を閉じた。茅コンは昭和 38 年に始まる。当時物性研の大学院生であった筆者にとって、このコンファレンスがかくも国内のコンファレンスとして確立した地位を得るとは予測もしなかったことである。私の父茅誠司が昭和 32 年に東京大学総長に選出された日、帰宅した父が母に、総長に選ばれたこと、えらばれたからには全力を尽くす義務があることを、なかば消極的にしかしやや喜色を見せて語ったとき、母が「あなた墮落したのね。」と父に告げたことは忘れもしない。母は、天文学者を父（つまり私の祖父）にもつ家庭で育ち、父と結婚して 5 人の子供を育て、つつましいけれども研究者としての誇りを忘れない夫をもつ家庭に満足をしていたように思う。このことがあって、総長を 6 年務め、定年退官した父に、多くの茅門下の方々が温かく学問で迎えるシステムとして茅コンが誕生したとのことである。第一回の世話人が、近角、伴野、安河内先生、第二回が鈴木（平）、田岡、飯田先生など、まさしく門下生のリーダーシップの下に茅コンが運営されていたことがわかる。

父は毎年 8 月の茅コンを待ちかねたように母を伴って参加し、物理の最先端を享受していた。母は学生時代から親のように慈しんでいた元学生を含む科学者たちの夫人、やがては父の後輩そして他分野の先端的研究リーダーの夫人たちと親交を深め、やがては親しい仲間として日常的な交わりを楽しんでいた。昭和 51 年以降は、企業等の寄付による学術振興会の公的基金を背景に茅コンの地位は安定なものとなり、磁性のみならず物性全般のテーマが取り上げられ、茅コンはかなりの知名度をもった。兄の陽一と私は、大学院終了後も電気工学と物理化学の分野の研究者として研究生活を送っていたが、多くの理工学の年配の研究者にとって、われわれ二人は茅コンで親交を持った両親の子供にすぎないと思われていたようである。結果として、私どもは、父の没後のコンファレンスに出席する機会を幾度か持ったに過ぎなく、茅コンを語る立場ではない。私自身は、特に最終章を含み 5 回程度の出席（そのうち 2 回は講演）であったが、終わってしまった今となると、茅コンの暖かく、しかも最先端の科学であり、分野を超えた議論の場は、米国の Gordon Conference にもないユニークなものだと捉えている。

しかし、茅コンの討論の主役いまだに過去のリーダーたちであること、現状では理工学の研究がより総合化され、社会にインパクトを与える力をもつものに成長していることを勘案すると本コンファレンスが終末を迎えるにいたったことが必然であるともいえる。わが国の科学研究の現役リーダーが立ち上がり、20 世紀とは異なった新しい研究分野を議論する場として、本コンファレンス同様な試みが再開されることを願ってやまない。

この場を借り、いままでの本コンファレンスを主催あるいは後援された多くの先生方、日本学術振興会、さらには分野を超えて参加された多くの方々に篤く御礼申し上げる。

(理化学研究所 先端計算機開発本部 副本部長)